

## 13

## 英国ロンドンにおける医学博物館の現状

牧野 洋<sup>1)</sup>, 土手健太郎<sup>2)</sup>, 菊地 博達<sup>3)</sup><sup>1)</sup> 浜松医科大学麻酔・蘇生学講座, <sup>2)</sup> 愛媛大学附属病院集中治療部, <sup>3)</sup> 我孫子東邦病院

博物館大国として知られる英国には、医学博物館も数多く存在する。渡英の機会にそれらの博物館を視察する機会に恵まれたため、報告する。

博物館の情報を収集するには、インターネット上に London's museums of health and medicine というポータルサイトが整備されており、ロンドンにある数多くの医学系博物館の情報が手に入る。

ロンドンの博物館で特筆すべきは学会により運営される博物館が多い事である。日本では学会の運営する博物館は日本麻酔科学会の運営する麻酔博物館のみであるが、ロンドンでは、内科学会、外科学会、産婦人科学会、眼科学会、麻酔科学会などが各科の歴史を後世に伝える博物館を運営している。内科学会、外科学会の博物館は面積も広く、その展示物の貴重さも群を抜いている。内科学会博物館訪問時には William Harvey の特別展示を行っており、自筆の草稿や、解剖講義時に使用した愛用の指示棒など大変貴重な品々が展示されていた。外科学会の博物館は2018年秋まで約2年にわたる全面的な改装を行っているが、改装が完成すれば、John Hunter の貴重な収集品を中心とするコレクションが最新の様式で展示される予定である。内科学会や外科学会の様に展示にスペースを割く事のできない学会も、空間を活用する工夫を行って展示を充実させていた。イギリス・アイルランド麻酔科医協会 (AAGBI) の運営する博物館の展示室は1部屋であるが、キャビネットの引き出しの中に効率的に物品を収納する等の工夫を凝らし、数多くの麻酔道具を展示していた。その他、麻酔科学会の会議室等にガラスキャビネットを置き、インテリアの一部として古い麻酔道具を展示する等の工夫を凝らしたり、定期的に企画展示を行うことで倉庫に收藏されている膨大な品々をローテーションして展示したりする等の工夫を行っていた。産婦人科学会の博物館は地階の廊下の壁面にキャビネットが配置されており、キャビネットを開けると、産科鉗子などの道具が整然とディスプレイされていた。廊下という限られたスペースではあるが、キャビネット式にする事で大変効率的で充実した展示となっていた。

聖バーソロミュー病院、ロイヤルロンドン病院など歴史ある病院も、病院の歴史を今に伝える博物館を持っており、ヘンリー八世から病院へ下された勅許状など大変古いものが展示されていたのには驚きを感じた。

日本においても、東京大学・広島大学・九州大学など一部の大学においては医学博物館が開設されているが、十分な数とは言えない。英国産婦人科学会の様な工夫を行えば、小規模の大学や病院、学会などでも十分に博物館を持つことができる。日本の各所に医学博物館が開設されることを願ってやまない。

London's museums of health and medicine

URL: <http://medicalmuseums.org/>